

第2章 一思い一



▲夫婦の日課である、「山歩き」。その道中、すれ違う人たちと笑顔であいさつを交わす宮崎さん夫婦

思い

もし、自分の愛する人が認知症と診断されたら、あなたは どうしますか。そして、これから待ち受ける介護という生活を思うとき、あなたはどこに、誰に、何を求めますか。一方、このような人たちを前にして、周りにいる私たちには何ができるでしょうか。宮崎修さん・記代子さんご夫婦が、これまでに歩んできた8年間のうちに、その答えはありました。



やされ、元気を取り戻していったという。
一方、このような組織の重要性を再認識した記代子さんは、平成20年に「天草認知症家族の会」の設立に参加。現在は、同会の代表を務めている。記代子さんは、「この会の活動を、多くの認知症の人やその家族に知ってほしい」と話す。

地域の人たちの支えが何よりうれしい

記代子さんは、修さんが認知症であることをより多くのの人に知ってほしいと考えている。こ

れは、認知症を正しく理解してもらうだけでなく、周囲の人たちからの支えや力添えも必要であると感じているからだ。このため、修さんの症状については、地域の人たちにもいつも話しをするようにしているほか、思いを市内外に広く伝えようと、講演活動にも取り組んでいる。
また、9月にはみずからの思いをつづった手記も出版した。「介護をする側にとっては、どうしても地域の中で疎外感を感じてしまう面がある。このような状況の中、地域の人たちから声をかけてもらうことは何よりうれしい」と記代子さんは話す。

悔やまれる2年という月日

志柿町に住む宮崎修さん・記代子さん夫婦。修さんは平成14年5月、60歳のときにアルツハイマー病（若年性認知症）の中期と診断された。認知症の兆候があらわれたのは平成13年、1日中野山を歩いたり、無口で消極的な日々が続いたりしたうえ、「死にたい」とつぶやくようになったことだ。記代子さんは医師の診察をすすめたが、本人は拒否。その後、記代子さんも受診を強制することはなかったという。そして、月日を重ねるうちに場所や時間、日にちがわからなくなるほか、人との会話も成立しなくなるなど、明らかな変調が見られ始めた修さん。ある日、見たこともないほどの険しい表情で、記代子さんを怒鳴りつけるという事件が起きる。「異常だと思い、すぐ保健所に連絡しました」。そこで、初めて医師の診察を受けることになる。修さんが「死にたい」とつぶやくようになってから、すでに2年がたっていた。記代子さんは、「今感じるこ

心は生きている

絵を描くことが趣味の記代子さんは、時間があれば描いているという。その作品の中に書かれていた文章の一節に、こんな言葉があった。いのちの輝きをありがとう。出版した本のタイトルにもなっているこの言葉は、修さんに贈ったメッセージだ。「夫の病状を公表することや家族の会で日ごろの悩みを打ち明けることは、夫のためだと思っているが、実はそれ以上に私のためでもある。そういう意味で、夫は一番の協力者であり、理解者だから」と記代子さん。



▲記代子さんが描いた作品

ながら「大丈夫かい、大丈夫かい」と繰り返し声をかけてくれたという。

心は生きている。当然のことではあるが、記代子さんは改めてそう感じた話す。「たとえ寝たきりの生活になっても、工夫して、夢を描いて、たくさんの幸せを発見できるように、夫といっしょに暮らしていきたい」と記代子さん。「いい奥さんですね」。その問いかけに対して、修さんは満面の笑みで「そうですね」と答えてくれた。

同じ思いを持つ人たちとのつながり

修さんが認知症と診断されたことは、同時に記代子さんによる夫への介護の始まりでもあった。夫への介護で心労を重ねる毎日、記代子さんは「夫と同じ病気のひと話を話したい。私も介護者どうしで悩みを話したい」という思いを抱くようになる。

そんな中、県に「認知症家族の会」という団体があることを知る。「この組織を探し当てるまでに4年。初めて参加したときは、これまでの思いを洗いざらい打ち明けました」と記代子さん。この会に参加するようになってからは、しだいに心もい

天草認知症家族の会

「天草認知症家族の会」では、認知症の人やその家族が抱えている悩みや、認知症に関する情報交換を目的に、毎月1回交流会を開催しています。また、認知症に関する各種相談も受け付けていますので、お気軽にご相談ください。

詳しいことは、同会へお尋ねください。

【問い合わせ先】
天草認知症家族の会
代表 宮崎記代子
☎0063